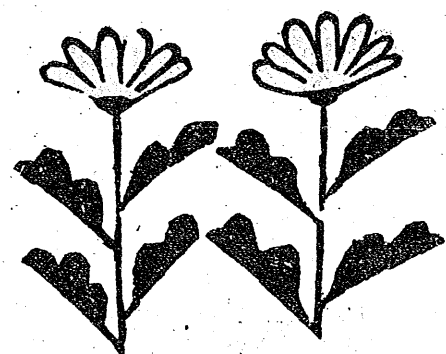
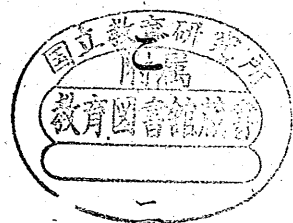
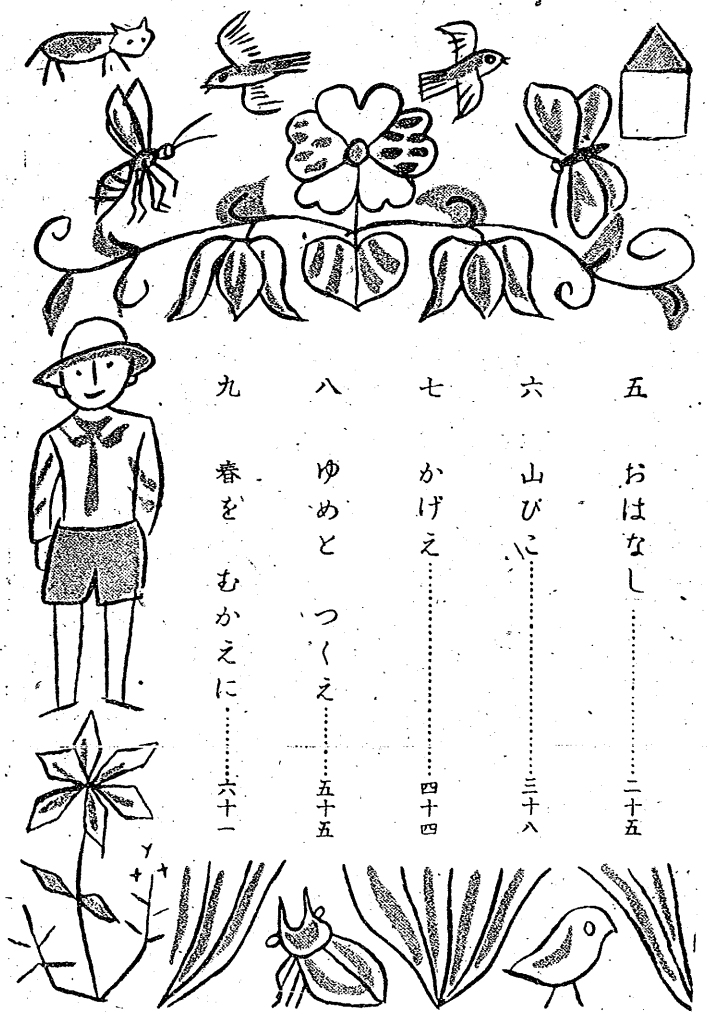




こ
く





- | | | | | |
|------|-----|-------|-------|-------|
| 九 | 八 | 七 | 六 | 五 |
| 春を | ゆめと | かげえ | 山びこ | おはなし |
| むかえに | つくえ | | | |
| 六十一 | 五十五 | 四十四 | 三十八 | 二十五 |



- | | | | | |
|-------|--------|-------|-----------|-------|
| 四 | 三 | 二 | 一 | |
| 先生 | ことばあそび | えにっき | 「あ」のつくことば | もくろく |
| | | | | |
| 二十一 | 十六 | 十二 | 四 | |

一「あの つく ことば

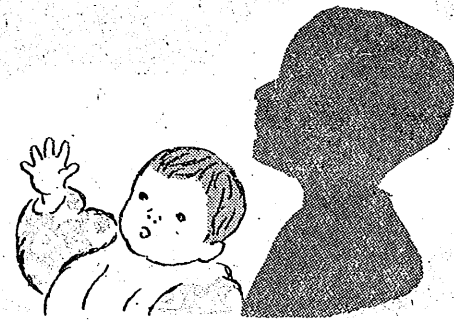
(二)

『あの つく ことばを、みんな
であつめて みましょう。』

「あたま——足——あご——あさ——
ひ——あした——あそこ——」

「それから。」

「あぶら。」



「あめ。」

「ふる あめですか。 たべる

あめですか。」

「たべる あめです。」

「それから。」

「あまの川。」

「」

「お友だちの なを かんがえ
て、 ごらんなき。」

「あつしさん——あきらさん——」



「あきこさん——」

「あやこさん。」

「あおきさん——あんどうさん。」

「あかちゃん——あかんぼ。」

「よく かんがえて ごらんさい。 まだ ありますよ。」

「あかい——あおい——あつまる——あそぶ——あさい——」

「あまい——」

「ここまで きた とき、とみこさんが、」

「あとで。」

と いいました。

すると、まさおさんが、

「あのね。」

と いいました。

「よく おもいつきましたね。」

では、「あさ」という ことば、

の つく ものを、あつめて

みました。

「あさがお——あさつゆ——あ

さかぜ——」

「あさばん——あさごはん——」

「あさおき——」

「——」



よしこさんが、

「あさねぼう。」

と、へんなこえていったので、みんなわらいました。



(二)

つぎの日に、「いのつくことばを あつめ

めました。
それから、「うのつくことばと」「えのつくことばを あつめました。」

おしまい、「おのつくことばを あつめました。」

あつめたことばを、みんなかきとめておきました。



(三)

先生が、それをごらんになって、

「せっかくあつめたことばが、ごちゃごちゃになっ
ています。なんとかして、そろえることはでき
ませんか。」

と おたずねになりました。

みんなは、いろいろかんがえました。

ふみおさんは、

「人の など、そうで ない ものにと、わけたら いい
と おもいます。」

と いいました。

はるこさんは、

「くさの など、とりの など、その ほかの ものにと、
わけたら いいと おもいます。」

と いいました。

ただしさんは、

「目に みえる ものと、みえない ものにと、わけたら
いいと おもいます。」

と いいました。

「では、めいめいの かんがえどおりに、わけて ごらん
なさい。」

そこで、みんなは、小さな かみに、ひとつひとつ
とばを かきつけました。そうして、ひとりびとりの か
んがえどおりに わけて みました。

わけて いる うちに、その わけがたが、いろいろに
かわって いきました。

はじめは むずかしいと おもいましたが、だんだん
おもしろく なりました。

二 えにつき

○
木のはをならべてみました。

かたちのにたものをならべてみました。

ちがったのをならべてみました。
いろいろかえてならべました。



○
お婆さんのうちから、大きなりんごをみつついただきました。ひとつはまっかでしたか、ひとつははんぶんだけみどりいろをしていました。

おさらにのせてかざりました。

○
大あめがふりました。

にわに 川が できました。
あめが やんで、にじが
できました。

大きな にじでした。

○
しゃぼんだまを ふいて
あそびました。

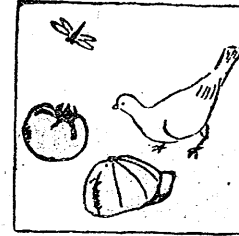
赤や 青や わらさきの
たまが できました。

ふたごも できました。



まんまるい お月さまが のぼりました。
あんな 大きな あかるい お月さまは どう したら
えに かく ことが できるでしょう。





三 ことばあそび

(二)

ただおさんたちが、ことばあそびを しました。
はじめに しりとりを しました。

ただおさん	みちこさん	まことさん	よしこさん
はと	とまと	どんぼ	ぼうし
しか	からす	すすめ	めだか
かめ	めじろ	—	ろばた

(二)

かんがえものをして あそびました。

「口から たべて、おなかから だす ものは なあに。」

「ぬれた きものを きて、かわくと ぬぐ ものは な。」

たい	いも	もち	—
ちくおんき	きしゃ	しゃしんや	やさい
いなご	ごま	まつ	つくえ



あに。

「上は大みず、下は大かじ、
なあに。」

「しゅうかんに一ど、赤い
きものをきるものはな
あに。」

「いちにちに二へんあるの。」

に、いちねんに一ぺんしかないものはなあに。

「いるときにいらなくて、いらないときにいる
ものはなあに。」

「ねむっていてもみえるものはなあに。」

(三)

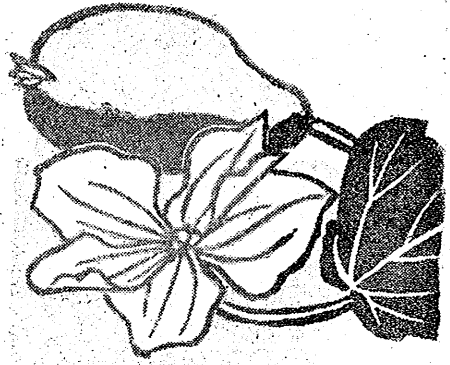


おわりに、ひとりがいったことばかり、おもいつい。

た　ことばを　じゅんじゅんに　つづけて、あそびました。

川	ほし	おとうさん	まんど	かぜ	まり	よしこさん
さかな	よる	にいさん	ごむぐつ	ゆき	りんご	まことさん
ふね	ゆめ	ねえさん	くつした	あめ	かき	みちこさん
なみ	山	はな	おかあさん	かさ	からす	ただおさん

四　先生



「先生、大きなくもがすを　かけて　いました。しまいまで　みて　いたいと　おもいましたが、かねが　なったので、やめて　きました。」

「先生、ゆうがおが　こんなに　大きく　なりました。」

「先生、わたしたち、もみじのはっぱで、いろはあそびをしました。よしこさんののは、いろはにほしかないのに、わたくしのは、いろはにほへどまでもありました。どうしてですか。」

「先生、すの おそうじを



するので、はとを だいで いたら、たいへん あついと おもいました。びょうきでは ないでしょうが。」

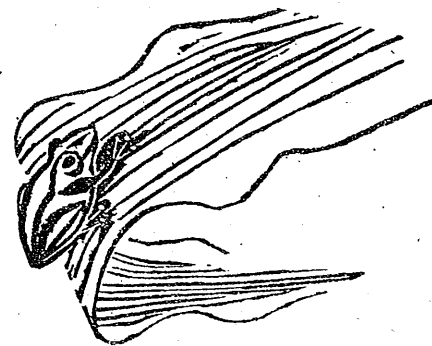


「先生、はねの いたんだ 大きな ちようちよが、けさも、ゆりの 花に きいて いましたよ。」

「先生、たいへんです。だりやの 花が、さきかけて しばみました。みて ください。」

「先生、いものはのつゆは、あれ、ただの水でしょうか。」

「先生、大きなあおがえるが、どうもろこしのはっぱに、じっとぶらさがっていました。あんまりいろがにているので、ぼくはじめはきがつきませんでした。」



「先生、でんせんに、つばめがたくさんとまっています。これからうんどうかいをするのですね。」



五 おはなし

じゅんぱんに、おはなしをしてきました。

きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、すみこさんと、くにおさんと、たけこさんと、この五人のばんです。

(二)

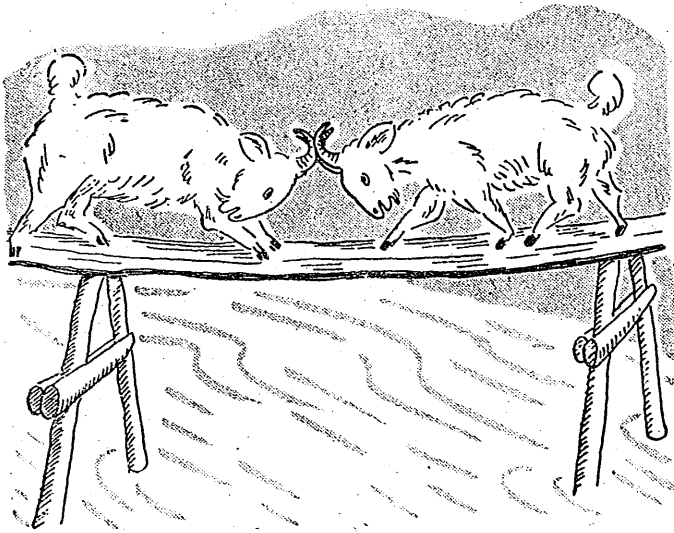
いちろうさんのしたおはなし。

「ある ところに、川が ありました。
くつが ながれて きました。
きゅうりが ながれて きました。
きゅうりが、くつの 中へ はいりました。
『きゅうくつ きゅうくつ』
と いいました。」

(二)

さだおさんの した。おはなし。
「せまい はとが ありました。」

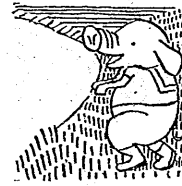
二ひきの やぎが、その
はしの まん中で あ
いました。
『きみ、どいて くれた
まえ。』
と、一ひきの やぎが
いいました。
『いやだよ。きみこそ
どいて くれたまえ。』
と、べつの やぎが い



いました。

やぎと やぎと、せまい はしの 上で、つのおし、
あって いました。

そのうちに、二ひきとも、どぶんと おちて しまいま
した。



(三)

すみこさんの した おはなし。

「十二ひきの ぶたが、そろって 川を わたりました。
あさい ところを わたりました。

きをつけて わたりましたから、みんな むこうの

きしに つきました。

きしに あがってから、かず

をかぞえて みました。

一ばん はじめに、ぶうちゃ

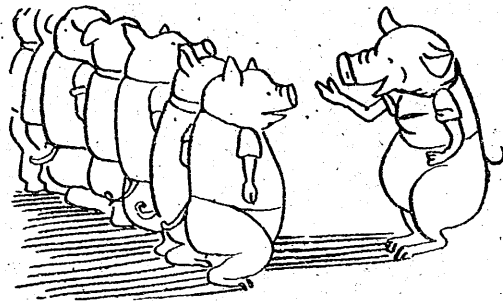
んが かぞえました。

「一ひき、二ひき、三ひき、

四ひき、五ひき、六ひき、

七ひき、八ひき、九ひき、

十ひき、十一ひき—— おや、十一ひきしかない。



「一ぴき たりない。」

ぶうちゃんは しんばいして、もう 一ど かぞえて
みました。

『一ぴき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひき、六ひき、
七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、十一ひき。』

やっぱり 十一ぴきしか いません。

『おかしいな。みんな わたった はずなのに、どう
したのだろう。』

『それでは、わたしが かぞえて みよう。』

どんちゃんが かぞえて みました。

やっぱり 十一ぴきしか いません。

『こんどは、ぼくが かぞえて みよう。』

ころちゃんが かぞえて みました。

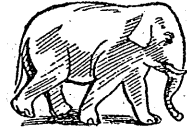
けれども、やっぱり 一ぴき たりません。

十二ひきの ぶたは、ぶうぶう といって さわぎたてま
した。

『一ぴき たりない。』

『一ぴき たりない。』

と いった、大さわぎを しました。



(四)

くにおさんのしたおはなし。

「あるところに、六人のめくらが、ありま
した。そのうちのひとりが、

「みんなは、ぞうと、いうものをみたことがあ
るか。」

と、いいました。

「わたしたちは、めくらだもの、みる、ごとなんか、で
きないよ。」

と、ほかのものが、いいました。

「いや、目で、みなくても、手で、さわった、ことが
あるかい。」

と、また、たずねました。

すると、みんなは、

「いや、まだ、さわって、みた、ことも、ない。
と、いいました。」

こんな、はなしを、して、いると、どしんどしんど、い
う、おとが、して、きました。

「めくらさん、めくらさん。ちょっと、そこを、どいて
ください。ぞうが、とおりますから。」

と、ぞうつかいが いました。

『もしもし、ちよっと その ぞうと いう ものに、

さわらせて くれませんか。』

『おねがいです。』

と、六人の めくらが、ぞうつかいに たのみました。

ぞうつかいは、

『じゃあ、さわって ごらん。』

と 言って、ぞうを とめました。

六人の めくらたちは、おそろおそろ ぞうの そばに
よって きました。

はじめの めくらは、ぞうの おなかを なでて、こう
いました。

『ははあ、ぞうは かべと おなじだ。』

二ばんめの めくらは、ぞうの きばに さわって、こ
う いました。

『ちがうよ。つるつるして、どがった ものじゃ ないか。』

三人めの めくらは、ぞうの はなに さわって、

『ぞうは、大きな へびみたいな ものさ。』

と いました。

四人めの めくらは、耳に さわって、

「ぞうは、大きなうちわに、にてゐるよ。」
と、いいました。

五人めのめくらは、足をなでて、

「ぞうは、木のみきとおなじじゃ、ないか。」
と、いいました。

おしまいのめくらは、しっ、

ぽをもって、いいました。

「みんな、大ちがいだ。ぞう！」

は、なわそっくりだ。」

めくらは、ひとりびとり、かつ、

てなことを、いうので、ぞうつかいは、わらいながら
いって、しまいました。」

(五)

たけこさんのした、おはなし。

「きのう、学校から、かえるとき、くにぎかいの山に、
ゆきがふって、ゐるのを、みつけました。」

「大きな、小さな。」

山から、小ぞうが、とんで、きた。」

どうたいながら、かえって、いきました。

空は、ほんとうに、青い、色でした。



六山びこ

でる人

たろう

おとうさん

山びこ(声ばかり)

ところ

山の中



たろうと おとうさんが、
山へ のぼって きます。

たろう「おとうさん、ここは、

ずいぶん 高いね。」

おとうさん「よく ここまで のぼった。すこし 休もうか。」

たろう「ええ、休みましょう。」

たろうは、あせを ふき



ながら、あたりの けしきを ながめます。

どこかで、かつこうが、「かつこう、かつこう」と なきます。
すると、とおくの ほうでも、「かつこう」と なきます。

たろうが、大きな 声で、「おうい、おうい」と さげびます。
すると、むこうの ほうで、「おうい」と さげびま
す。

たろう 「おうい。」

山びこ 「おうい。」

たろう 「だれたあ。」

山びこ 「だれたあ。」

たろう 「ぼく、たろうだよ。」

山びこ 「たろうだよ。」

たろう 「ぼくが たろうだよ。」

山びこ 「たろうだよ。」

たろう 「うそ つくな。」

山びこ 「うそ つくな。」

たろう 「ばか。」

山びこ 「ばか。」

さとう 「これ、これ、たろう。そんな きたない ことばを





つかうものではないよ。

たろう 「だって、だれかがばかにする」

んだもの。」

おとうさん 「おまえが、口ぎたなく、いうから」

だよ。おまえが、きれいなこと」

ばで、いえば、あちらだって、き」

れいに、いうさ。」

たろう 「ほんとう、おとうさん。」

おとうさん 「ほんとうだとも。いって、ごらん。」

たろう 「ごめんね。」

山びこ 「ごめんね。」

たろう 「ぼくが、わかったたよう。」

山びこ 「わかったたよう。」

おとうさん 「ほら、ちゃんとあやまるだろ。」

たろう 「おとうさんの、おっしゃる、とおりですね。」

おとうさん 「さあ、もうすこしのぼろ。」

たろう 「のぼろ。」

たろうは、げんきよく、あるきだします。かっこうが、とおくで、しずかに、なきます。



七かげえ

(三)

「おじさん、こんやもまた、かげえをして、みせてください。」

「よろしい、ではやりますよ。」

「さあ、いぬだよ。」

「わん、わん、わん。」

「こんどはきつね。」

「こんこん、こんこん。」

「これは、とび。くちばしを、ごらん。」

「はやく、せんだうさんをみせてください。」

「はい、これは、せんだうさん。長い竹のさおで、ふねを、ごぎます。」

「おじさん、こんどは、わたくしがやってみましょうか。」

「ほう、なにをやるかな。」

「これは、なんですか。」

「さあ、なんだろう。手の上に、ごむまりをのせて」

いるね。

「そうです。」

「ふうせんかな。」

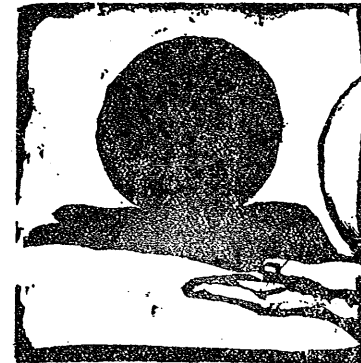
「ちがいます。」

「ちきゅうだろう。」

「いいえ、これは、お月さまが、くもからでてくるところです。」

(三)

でる人 いちろう



じろう

いもうどの さちこ

おかあさん

ところへやの中

一の ばめん

いちろうがでてきます。

「このおいしそうなりんご。」

手に大きなりんごを

もって、います。うれしそ



うに、その りんごを、高く さしあげたり においを
かいだり します。それから、となりの へやへ いこ
うと して、きゅうに たちどまります。
うしろを ふりかえって 手まねきを します。

二の ばめん

そこへ、じろうが でて きます。

「にいさん、なあに。」

いちろうは、りんごを だして、じろうの 手に わた
します。

「にいさん、ありがとうございます。」

いちろうは、となりの へやへ いきます。

三の ばめん

じろうは、よろこんで、
りんごを もって とび
まわります。



上に なげては うけ、

うけては 上に なげて、 よろこびます。

それから、じろうは、りんごを たべようと します。

けれども、それを やめて、しばらく かんがえます。
うしろを ふりかえって、手まねきを します。

四の ばめん

さちこが、走って でて きます。

「にいさん、なあに。」

じろうは、大きな りんごを さちこに わたします。

「まあ、きれいな りんご。」

「あげよう。」

じろうも、となりの へやへ 行って しまいます。

五の ばめん

さちこは、りんごを だいたり、ほお
につけたり、おどったり します。

きゅうに おどりを やめて、しずか
になります。

そうして、きゅうに 走って たちさ
ります。

六の ばめん



一ど くらくなり、また あかるく なると、おかあさんが、いすに こしかけて、本を よんで いらっしゃいます。

「おかあさん、どこ。」

と、いう、さちこの 声が します。

「ここですよ、さちこさん。」

さちこが、おかあさんの そばに かけよります。

大きな りんごを、おかあさんに あげます。

おかあさんは、本を おいて、りんごを 手に うけとります。

けれども、また さちこに、りんごを かえします。さちこは、また おかあさんに あげます。どうとう、おかあさんは、さちこから りんごを もらいます。

「この りんご、じろくに、いさんに いただいたの。こー、いって、さちこは、



じろうを手まねきします。

じろうが、走ってでてきます。

「ああ、そのりんご、いちろうにさんからもらったのです。」

こういって、いちろうをよびます。

いちろうが、走ってでてきます。

おかあさんのよこに、三人が立ちます。おかあさんは、三人のあたまを、しずかになでてやります。

ハ　ゆめと　つぐえ

(二)

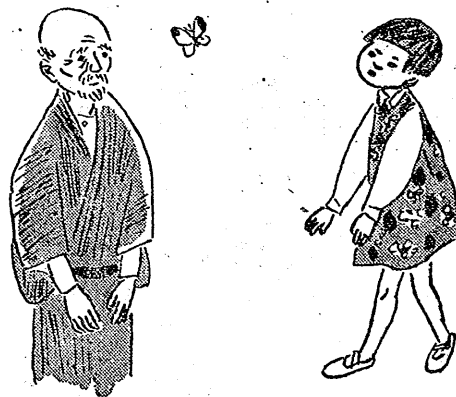
ゆうべ、ねどこにはいってから、こんなことをか
んがえました。

わたくしには、おとうさんもあります。おじいさんも
あります。けれども、おじいさんのおとうさんは、お
い
でに
な
り
ま
せ
ん。
いまは
お
い
で
に
な
り
ま
せ
ん
が、ま
え
に
は
お
い
で
に
な
っ
た
に
ち
が
い
あ
り
ま
せ
ん。

それは、どんなか、
 たったでしよう。
 こんなことをか、
 んがえて、いるう、
 ちに、いつのまに、
 か、ねむってしま、
 いました。
 ゆめに、ひろいの、
 はらを、みました。
 なの花が、いちめん、



に、さいて、いました。
 ちようちょも、とんで
 いました。
 わたくしは、「みんな
 いいことをうたいながら、
 あるいて、いききました。
 そこへ、ひとりのお、
 じいさんが、でてきま、
 した。みると、わたくし
 のおじいさんに、よく



にた かたでした。

わたくしは、おもわず、

「おじいさん。」

と いいますと、その かたは、

「わたしは、おまえの おじいさんの おとうさんだよ。」
と、いって、にこにこ なさいました。

(三)

先生が、こんな おはなしを なさいました。

「みなさんの つかって いる つくえも、こしかけも、

長い あいだ はたらいて

きました。

二年生も、これで、べんきょ

うを しました。三年生も、

これで、べんきょうしまし
た。

四年の 人たちも、五年の

人たちも、六年の 人たち

も、その まえの 人たち

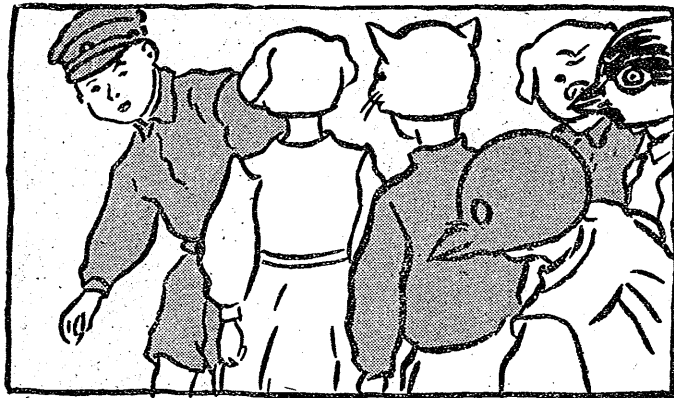
も、これを、つかいました。



ここまで おはなしを きいた とき、わたくしは、ふ
と、ゆうべの ゆめを、おもいだしました。

先生は、つづけて おっしゃいました。

「こんど、みなさんが 二年生に なったら、あたらしい
一年生が はいって きます。そうして、これを つか
いますよ。ですから、この つくえや こしかけを、か
わいがって やりましょうね。」



九 春を むかえに

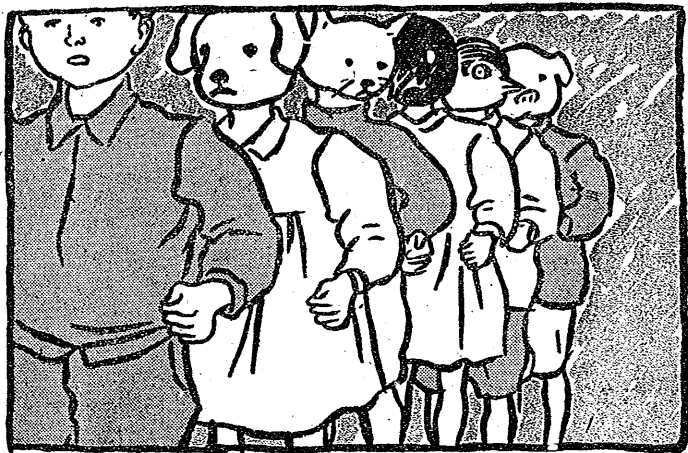
これは、よびかけです。みんなで
かんがえて、やりましょう。

(一)

「さあ、春を むかえに、
かけましょう。」

みんな「でかけましょう。」

「みんな のりましたか。」



みんな「のりました。」

いよう「ぼちさんはのりましたか。」

ぼち「わんわん、わんわん。」

いよう「みけちゃんは。」

みけ「にゃお、にゃお、にゃお。」

いよう「からすさんは。」

からす「かああ、かああ。」

いよう「すずめさんは。」

すずめ「ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。」

いよう「それからぶうちゃんは。」

ぶた「ぶうぶう、ぶうぶう。」

いよう「みんな、そろいましたね。」

みんな「そろいました。」

いよう「では、しゅっぱつ。」

みんな「しゅっぱつ。しゅっぱつ。」

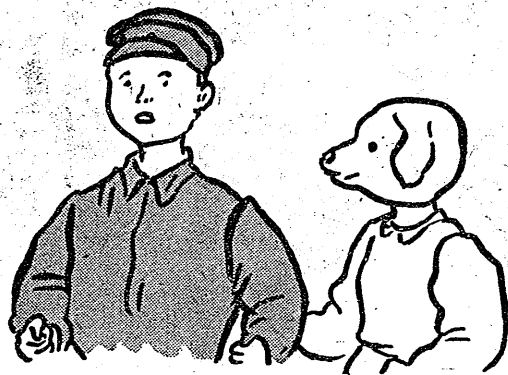
いよう「ぼぼう、ぼぼう。」

みんな「しゅう、しゅう、しゅう、しゅう、

しゅう、しゅう、しゅう、しゅう、

しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、

しゅ、しゅしゅしゅ。」



からす 「あたたかいーかぜが ふう
 て くる。」
 みんな 「ふいて くる。あたたかい
 かぜ。」
 しゃ 「ぼう、ぼう。」
 みんな 「しゅしゅしゅしゅ……」
 ぼち 「空が あかるく なって
 きた。」
 みんな 「あかるく なって きた。」
 みけ 「やあ、かすみが たなびい



だんだん はやく なる。
 りょううてを 車のように う
 がかす。
 (三)
 ぶた 「だんだん はやく なる。」
 みんな 「はやく なる。」
 すずめ 「もう、『冬の 國』も すぎて
 いく。」
 みんな 「すぎて いく。」

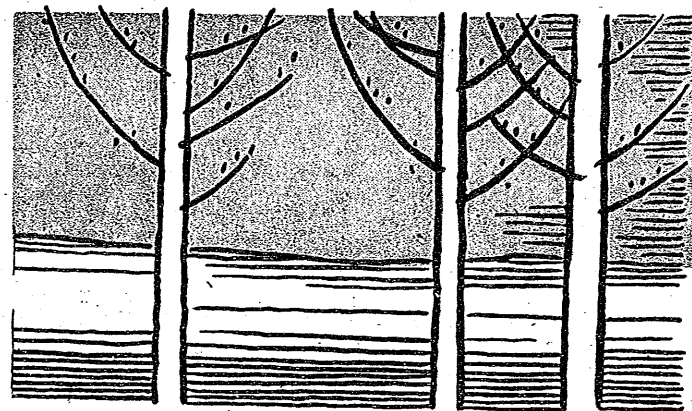


みんな「ひばりさんだ。」
ふた「おや、ひばりさんだ。」

そのとき、かげのほうで、
びいちく、びいちく、びいびい
びいびい
と、いう声が入る。

みんなは、小さな声で、「しゅしゅ
しゅしゅ」をつづけながら、
春をさがす。

るよ。

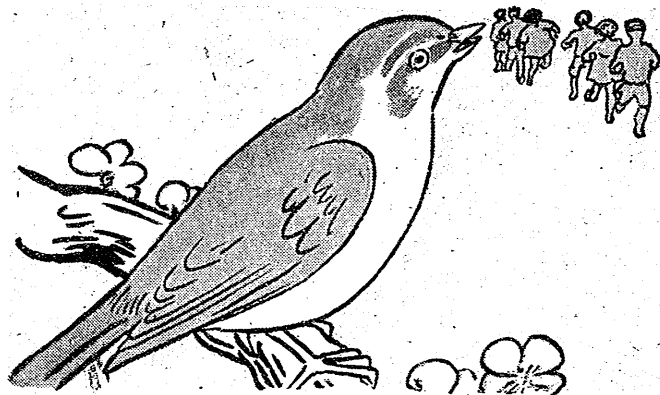


でいる。
みんな「たなびいて、いる、きれい
な、かすみ。」

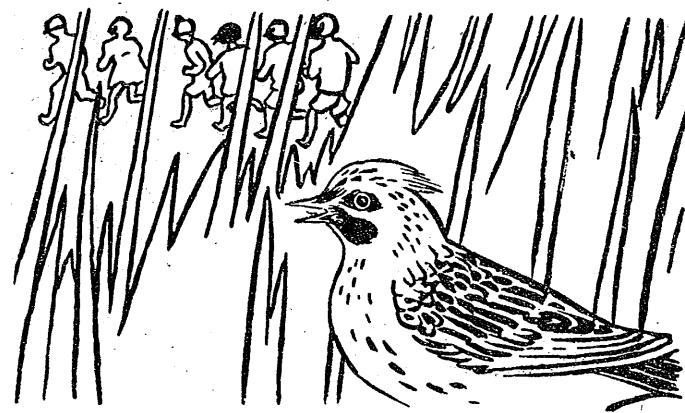
「ちょっと、ちょっと、しず
かに。」

みんなは、「しゅしゅしゅしゅを、
きゆうに、しずかに、いう、けれ
ども、うごかす、はやさにか、わ
りはない。」

「どこかで、春の、声が入る。」



しょう「そうだ。はやく いこう。」
 みんな「はやく、はやく。」
 「じゅしゅしゅしゅ」を、いつそう
 げんきよくいう。
 しょう「きこえる、きこえる。しずか
 にして。もっとしずかに。
 みんな、きき耳をたてる。
 「じゅしゅしゅしゅ」は、ひぐく
 つづいてる。



しょう「たしかに 春の 声がきこえる。」
 そのとき、かげのほうで、
 「ほう、ほけきよ。」
 「ほう、ほけきよ。」
 となく。
 すずめ「まあ、うぐいすさんよ。
 みんな「うぐいすさん、うぐいすさ」

(三)

あん。

い^や「もう じき『春の 國』だ。」

み^な「よんで みよう。」

い^や「春の 國』さあん。『春の 國』さあん。」

すこし たって、かげの ほうで、

「はあい、ここですよう。」

「はやく いらっしゃあい。」

と いう 声 が する。この 声 は ひとりでは なく、大
ぜいの 声。

い^や「さあ、ぜんそくり よくだ。」

み^な「ぜんそくり よく。」

「ぼう。『しゅしゅしゅしゅ』。『ぼう。『しゅしゅしゅしゅ』。」

いきおいよく 走る きもち、それが だんだんと お

く なるように、小さく する。

K160.8-1-2

こくご二 第一學年後期用
Approved by Ministry of Education
(Date Sep. 30, 1947)

昭和二十二年九月三十日 印刷
昭和二十二年十月十日 發行
(昭和二十二年九月三十日 文部省検査済)

著作権所有 著作權發行者 文 部 省

印刷發行者 東京都北區堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所 東京都北區堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社

發行所 東京都北區堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社

立 (54)	高 (39)	耳 (35)	青 (14)	友 (5)
年 (59)	休 (39)	学 (37)	上 (18)	先 (9)
春 (61)	長 (45)	校 (37)	下 (18)	生 (9)
車 (64)	竹 (45)	空 (37)	花 (23)	小 (11)
冬 (64)	走 (50)	色 (37)	水 (24)	大 (13)
國 (64)	本 (52)	声 (38)	中 (26)	赤 (14)

1933年度

— 72 —

購入 文生書院

